

本編⑧「儀法 vatta 犍度（小品第八：行儀作法）」2020.7.25

比丘（同士）の行儀作法についての「犍度（体系的にまとめたもの）」
の つづき

客比丘から旧比丘と精舎へのアプローチ、旧比丘から客比丘へのアプローチ
が終わって、その後の記録は、

◎その他の精舎での振る舞い「儀法」について（合計14項目）

④随喜すべし⇒食堂での儀法

あるとき、比丘たちは食堂 bhattagga において随喜 anumodati（在家者の善行為
を祝福する説法）をしなかった。

（在家の）人々 manussā がイライラ、怒る、悩む。「どうして……」

→比丘たちが聞き、世尊に報告。⇒世尊が儀法を制定。

「食堂で随喜することを許す anujānāmi bhikkhave bhattagge anumoditum」。

※許すの原語 jānāmi は「(あなたたちがやることを) 私も沿って知っていますよ」。

悪行為は絶対禁止命令。条項による戒律。それでもやるから注意のために罰則がある。

Sabba-pāpassa akaraṇaṃ. → 具足戒

善行為は、やってもやってもきりがないので、絶対やれの命令にならない。勧める。

Kusalassa upasampadā. → 犍度（サンガ運営のシステムのまとめ）

だから、運営などの犍度は、禁止中心（全部ではない）の具足戒と、自然に別になる。

※釈尊当時は、食堂とは、村にある比丘のための給食堂。

現在は寺の境内にも食堂があるが、食堂だけ結界から除外された在家の土地家屋と見
なされる。ただ托鉢でいただいたものを配食するだけでも、在家者が自由に世話をするな
ら、その食堂は在家者のものと見た方がよい。

食堂が調理場（出家は調理できない）や食品庫（出家は正午を過ぎたら食物を廃棄し
なければならない）を兼ねる場合は、食堂を在家のものとして見て、戒律に触れない。

すると比丘たちに思いが生じた「誰が随喜すべきだろうか」。

世尊に問う。「長老比丘が therena bhikkhunā、食堂で随喜することを許す」と。

※長老という呼び方も仏滅前からあったと分かる。

あるとき、一群の人々が僧次食 saṃghabhatta（※ここでは「毎日何名ずつを自宅に
招待する」のではなく精舎の食堂で。しかし、下に見るように釈尊がこの食に参加してい

ないので、托鉢組と食堂で食べる組などローテーションで分かれていたかも)をおこない、**āyasmā** 具寿サーリプッタが(その日の) **saṃghathero** サンガ長老だった。

他の比丘たちは「長老比丘が随喜するのだから」とサーリプッタ長老を一人残して立ち去った。サーリプッタ尊者は、その人々に対して随喜し、後から一人で帰った。世尊はサーリプッタ尊者が一人で来られるのを遠くからご覧になり、「食は豊か **iddham** でしたか?」「尊師、食は豊かでしたが、私を一人残して、比丘たちはみんな先に帰っちゃいました」。⇒世尊が儀法を制定。

「4、5人の長老隋長老 **therānuthera** の比丘が(随喜の間)待つことを許す」。

※法臘(出家年数)の順。2番目、3番目の長老が随喜するときはそれ以下に3、2人。

あるとき、随喜説法が終わるのを待っている間に一人が用便を我慢しきれず氣絶。「用事があるときはすぐ次の **ānantarika** 比丘に頼んで去ることを許す」。

○食堂での儀法(立ち居振る舞い)

あるとき六群比丘は、上衣下衣を整えず、威儀が揃 **ākappa-sampanna** わないまま食堂に行き、長老比丘より前に行って長老比丘を侵害して坐ったり、新参比丘の座を奪ったり、大衣を広げて(これは屋外の作法)屋内に坐ったりした。

少欲の比丘たちはイライラ、怒る、悩む。⇒釈尊に報告。

「では、比丘たちの食堂での儀法を制定します」。

↓ ※個人の行儀作法なので比丘戒最後の衆学法75項目と重なる。

○行き：

僧園(境内)にいて[食事の]時が告げられたら、三輪 **timaṇḍala** (へそと両ひざ)を覆い、下衣を巻き付け、帯 **kāyabandhana** を締め、大衣を畳んで紐で縛って、鉢を洗って携え、よく慌てずに村 **gāma** に入るべし。

横を歩いて長老比丘たちの前に入るべからず。

よく身を覆って屋内 **antaraghara** を行くべし。よく身を制御して **saṃvuta** 屋内に行くべし。眼を下に向けて **okkhittacakkhunā** 屋内に行くべし。(衣?眼?)を上げずに **na ukkhittakāya** 屋内に行くべし。

笑いながら屋内に行くべからず。大声で……身体を揺らして……肘を揺らして……頭を揺らして……腰に手を当てて **khambhakatena**……頭を覆って……屈んで **ukkuṭikāya** 屋内に行くべからず。

よく身を覆って屋内に座すべし。よく身を制御して屋内に座すべし。眼を下に向けて屋内に座すべし。(衣?眼?)を上げずに屋内に座すべし。

笑いながら屋内に座すべからず。大声で……身体を揺らして……肘を揺らし

で……頭を揺らして……腰に手を当てて……頭を覆って……屈んで屋内に座すべからず。身体を投げ出すように屋内に座すべからず。

長老比丘を侵害して坐すべからず。新参比丘の座を奪うべからず。大衣を広げて屋内に坐すべからず。(飲食物の受け方につづく)

○食堂での儀法（飲食物の受け方）

[洗い] 水を受けるときは両手で鉢を持って水を受けるべし。下に置いて、ぶつからないように鉢をよく洗うべし。

もし水を受ける人がいれば、下に置いて、水を受ける容器に水を灌ぐべし。水を受ける人に水をかけるべからず。周りの比丘たちに水をかけるべからず。大衣に水をかけるべからず。

もし水を受ける人がいなければ、下に置いて、地面に水を灌ぐべし。周りの比丘たちに……大衣に水をかけるべからず。

○食前：

ご飯を受けるときは、両手で鉢を持ってご飯を受けるべし。カレーのスペースを残すべし *sūpassa okāso kātabbo*。もしバター *sappi* 油 *tela* おかわり(デザート) *uttaribhaṅga* があれば、長老が言うべし「全員に等しく給仕せよ」と。[給仕者に対し] 心をこめて鉢食 *piṇḍapāta* を受けるべし。[中の食物ではなく] 鉢に心を置いて *pattasaññinā* 鉢食を受けるべし。等しくカレーを入れた鉢食を受けるべし。等しく縁まで入った鉢食を受けるべし。全員がご飯を受けるまでは長老は食してはならない。

○食中：

心をこめて鉢食を食すべし。鉢に心を置いて鉢食を食すべし。順々に *sapadāno* 鉢食を食すべし。カレーと一緒に鉢食を食すべし。出っ張ったところを潰して *thūpakato omadditvā* 食すべからず。より多くを得たくて *bhiyyo-kamyatā [kāma-]* カレーや副菜 *vyañjana* をご飯で隠すべからず。カレーやご飯を病気ではないのに自分のために催促して *viññāpetvā* 食すべからず。

○食べ方：

嫌な気持ちで *ujjhānasaññinā* 他者の鉢を見るべからず。[右手で丸めるとき] 大き過ぎるご飯の塊を作るべからず。丸い塊を作るべし。塊が運ばれないうちから口を開けるべからず。食すとき、すべての手(指五本とも)を口に入れるべからず。口に塊が入ったまま喋るべからず。塊を[口に] 投げ入れて食すべからず。塊を齧って食すべからず。頬張って食すべからず。手をぶらぶら動か

しながら食すべからず。ご飯粒を撒き散らしながら食すべからず。舌を出して食すべからず。チャップチャップと音を出して食すべからず。スルスルと音を出して啜るべからず。手を舐めながら食すべからず。鉢を舐めながら……唇を舐めながら……汚れた（食物に触れた）sāmisa 手で飲み水 pāniya の瓶を取るべからず。

○食後：

全員が食し終わるまで長老は〔洗うための〕水 udaka を取るべからず。

（以下、洗い方は最初と同じ）

〔洗い〕水を受けるときは両手で鉢を持って水を受けるべし。下に置いて、ぶつかないように鉢をよく洗うべし。

もし水を受ける人がいれば、下に置いて、水を受ける容器に水を灌ぐべし。水を受ける人に水をかけるべからず。周りの比丘たちに水をかけるべからず。大衣に水をかけるべからず。

もし水を受ける人がいなければ、下に置いて、地面に水を灌ぐべし。周りの比丘たちに……大衣に水をかけるべからず。

飯粒がある鉢の洗い水を屋内に灌ぐべからず。

○帰り：

帰るときは新参比丘たちを先頭に帰るべし。後から長老比丘たちが帰るべし。

よく身を覆って屋内に行くべし。よく身を制御して屋内に行くべし。眼を下に向けて屋内に行くべし。（衣？眼？を）上げずに屋内に行くべし。

笑いながら屋内に行くべからず。大声で……身体を揺らして……肘を揺らして……頭を揺らして……腰に手を当てて……頭を覆って……屈んで屋内に行くべからず。（以上）

⑤托鉢の儀法

あるとき、